

[1] 芸術工学研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2928811>

出版情報：芸術工学研究. 1, 2004-03-12. 九州大学大学院芸術工学研究院
バージョン：
権利関係：

九州大学大学院芸術工学研究院紀要「芸術工学研究」 刊行にあたって

大学院芸術工学院院长 佐藤陽彦

九州芸術工科大学は平成15年10月1日に九州大学と統合し、その教員組織は九州大学大学院芸術工学研究院となった。

九州芸術工科大学は、昭和43（1968）年、高度成長の歪みが見えはじめ、いわゆる公害など技術の独走による人間疎外が問題とされた当時の社会状況を踏まえて、「技術の人間化」を標榜し、「設計（デザイン）」を理念として創設された。技術の人間化とは、一つには、技術の発展自体を人間の基準に立脚して進めることであり、二つには、技術の発展を人類の福祉と人間生活の一層の充実のために役立たせることである。言い換えれば、技術の基盤である科学と人間精神の最も自由な発現である芸術とを統合し、技術の進路を計画し、その機能を設計する、すなわち、きわめて高次のデザインを確立することである。

それから35年、九州芸術工科大学はさまざまな研究や作品を発表し、また多くの有能な人材を輩出して、産業界をはじめ社会の多様な分野で活躍し、社会に貢献してきた。「技術の人間化」を目指した芸術工学の理念は、地球規模での思考や遺伝的な人間の資質への考慮など「人間化」の概念を深化させつつ、現在、益々その重要性を増している。しかし、環境共生社会や高度情報化社会の到来とともに、芸術工学が対象にしてきた分野は著しく拡大し、複雑になっており、九州大学が有する多様で高度な諸科学との密接な連携による芸術工学の更なる飛躍を目指して、九州大学と統合した。

統合を契機として大学院芸術工学研究院紀要「芸術工学研究」を刊行することとした。実は「芸術工学研究」は九州芸術工科大学において有志により1999（平成11）年10月のNo.1から2003（平成15）年3月のNo.6まで発行されてきた。この度、同一誌名ながら巻号を新たにして九州大学大学院芸術工学研究院の紀要として「芸術工学研究」を刊行する。本誌が芸術工学の一層の発展に資することを期待している。

刊行によせて

片野 博

この度、「芸術工学研究」が九州大学大学院芸術工学研究院の紀要として発刊されることに対して特別の思いがあります。

省みるに、かつては一般教育系列等の教官によって自主的に刊行された研究誌があり、芸術工学に関わる研究の成果が公表されていきました。ところが、大綱化等による組織の改編により、やむなく廃刊にいたった経緯があります。その後も、学内において研究誌の刊行に対する強い要望もあり、平成11年には25人の教官が費用を負担する形で再度研究誌の発刊を行い、翌年からは当時の吉田将学長の援助もあって、学長裁量経費により発刊を継続してきました。いわゆる認知された紀要ではありませんでしたが、芸術工学に対して多方面からの論究がなされ、大学の費用をもって発刊できたことは、半認知であったとしても不都合はないと考えられます。

研究誌としての紀要の位置は、必ずしも一般に高く評価されるものでなく、学会誌、いわゆるジャーナルの掲載をもって学問的業績が達成されたとする見解が一般的です。しかしながら、学際領域を標榜する芸術工学にあつては、対象や発表形式において既存の学問のルールとは異なった展開が求められていることも事実です。以下では、学長裁量経費の採択に向けた申請書の内容を示しますが、この内容は紀要としての「芸術工学研究」にもあてはまるものと確信します。

「本学には紀要がなく、平成11年度から今回予算申請する「芸術工学研究」を有志の手により発刊してきた。しかしながら、他の芸術工学系大学がその存在をアピールするため積極的に紀要を刊行し、研究成果を世に問うなか、本学では遅れをとっているといわざるを得ない。また、組織・部局として紀要をもたぬことは、紀要を発表の場とする文系分野では研究の停滞要因になること、理工系でも細分化され、かつ、掲載頁数の制限がある学会誌では馴染まない研究のスタイルがあること、学際性を基調とした萌芽的研究は議論の展開する場がないことと、デザイン・芸術系では論の展開や作品解説の場が制限されることなどの面で弊害が指摘できる。こうした環境の中、正式に認知された紀要には該当しないが、その準備段階として学術誌「芸術工学研究」を刊行することは、研究機関として本学の存在を学外にアピールし、本学における研究の幅を広げるとともに水準を引き上げる効果が期待できる。」

芸術工学は学際的な学問分野であるから、自らの殻に閉じこもるような研究誌を発刊し、これに投稿するよりは、研究者の所属する学会に発表し、芸術工学を世に問う方が適切であるとの意見が多かったように思います。確かに専門の学問領域に通じた査読者が論文の適否を判断する方が質の高さを確保できますので、ジャーナルの方が発表母胎として適切ですが、上記に述べた

ような研究の多様性を考慮すると、別の媒体である紀要という選択肢がありますし、さらに一番重要な問題として、既往の学問領域を越えた「芸術工学」の存在を示す必要があります。斯学問分野であれば、発表媒体として芸術工学会の機関誌である「芸術工学会誌」があるとの指摘はもっともなものです。斯学会＝本学の芸術工学研究院とは一致しませんし、多様な研究内容が保証されるものでもありません。従って研究成果を部局として公開する紀要の存在が強く求められる訳です。

また、芸術工学の分野では学術論文の領域だけでなく、作品や設計・計画も研究の主要な部分を占め、一般にいわれるジャーナルとは異なった内容・性格が求められます。このためにも、従来の殻にとらわれない新たな研究発表媒体の紀要が求められる訳です。

これまでの任意による発刊の時にも掲載論文等については、十分な査読規定を設け、一定のレベルの確保につとめました。さらに今回の紀要化に際しては、さらに厳しい基準をつくり、質の確保を目指しています。初めから権威ある学術雑誌なるものは存在するはずがなく、投稿された、掲載された研究（論文）の質の高さが蓄積されることによって評価があがるはず。従って、今後のよりよい展開をここに期待します。